

研究協議のまとめ

大会研究部長 丹羽 隆

島根県では「^{かみありづき}神在月」と呼ばれる10月に、大会主題「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、及び大会副主題「ふるさとを学びの原点に 主体的・協働的に学び合い 豊かな未来社会を創る子どもの育成」の下、13の分科会において島根会場と東京会場を結んでご協議いただきました。貴重なご提言を頂きました発表者の皆様、そして、分科会の運営に携わっていただいた皆様、また、「校長の果たすべき役割と指導性の究明」に向けて熱心にご協議いただきましたご参会の皆様、並びに、オンラインやオンデマンドで配信をご覧いただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。それでは、分科会ごとに、研究協議を簡単に総括いたします。

第1分科会では、教職員が同じ方向性を持つための理論に基づく計画的な学校経営ビジョン策定方法とモデルプランの提示、校長の信念を反映させた経営上の重点を焦点化しキーワードを用いて児童や教職員に目標等を浸透させる取組の有効性が確認されました。

第2分科会では、活力ある組織づくりのために校長が現状を分析・評価し、教職員への適切な指導や教育活動の改善を図っていくこと、特に地域連携は教育ビジョンの実現に不可欠な要素であり「開かれた教育課程」という観点からも重要なことが確認されました。

第3分科会では、各校の学校評価実施状況の情報交換や、学校経営説明会等による地域・保護者への「学校の応援団」としての協力啓発の大切さ、記名式での評価の利点、情報提供の重要性が確認され、当事者意識をもって学校評価をする大切さが報告されました。

第4分科会では、教職員の意識を変えて既成概念を取り払うために校長のリーダーシップは重要であり、チーム学校として人材育成し、取組を継続しつつ、行政との連携と外部人材を活用し、取組の効果を校長同士が情報共有することの重要性が確認されました。

第5分科会では、道徳教育・人権教育の推進について校長のリーダーシップのもと、どんな子どもを育てたいかを共有し、学校の枠を超えた、地域・保護者・学校間のつながりの中で、教職員のベクトルをそろえ、学校運営に取組めるよう働きかける大切さが確認されました。

第6分科会では、健やかな体を育むため、実態把握による校長のビジョン共有化、教職員の研修、家庭や他団体との連携が重要であり、学校だけで解決できないことを地域や社会教育へ働きかける校長の発信力の必要性などが確認されました。

第7分科会では、共通するキーワードは「必然性と同僚性」であり、校長は、教職員一人一人の意識の違いを認識しながら、いかに必然性のある課題を設定し、どのような手法を取り入れるのか、研修や研究の在り方を常に模索し続けることの必要性が確認されました。

第8分科会では、リーダーの育成には、キャリアステージを踏まえた計画的な育成が必要であり、そのために人材の有効活用や校務分掌への配置、キャリアプランの可視化、地域校長会や行政との連携、任せて育てる校長の姿勢等が必要であることが確認されました。

第9分科会では、「自ら判断し行動できる子どもを育てる」ために、行政組織や地域住民との連携は不可欠であり、日常生活への指導の中に安全・防災教育に対しての重要な視点があり、その指導を発展的に積み重ねていくことが重要であることが確認されました。

第10分科会では、校長のリーダーシップにより、情報共有・発信をし、学校・地域・行政・関係機関が一体となって危機管理に取り組むことや、教職員が個性を生かし、当事者意識を高め、主体的に動く組織を構築することの重要性が確認されました。

第11分科会では、小中一貫の取組を行うことが重要であり、地域の物的・人的資源を最大限に活用し、社会形成能力の育成に向けたグラウンドデザインを明確にして実践することが必要で、校長の役割＝「つなぐ」であることが確認されました。

第12分科会では、理解教育推進、校長のリーダーシップと教職員の協力、持続可能となる研修継続について確認し、「自己有用感」をキーワードとして、小中連携及び児童の実態とのリンク、キャリアパスポートの活用、教職員の自己有用感について確認されました。

第13分科会では、校長は地域と学校をつなぐ仕掛けや仕組づくり、ゴールをイメージした接続のためのビジョンの共有、人材育成や職員の研修をコーディネートすることが重要であり、最終的に人と人とをつなげることが大切であると確認されました。

以上のように、研究協議について報告させていただきます。

本大会では、東京会場と、島根会場をオンラインでつなぎ、双方の発表及び分科会場協議の様子を「伝え合う」という形で行いました。協議中、音声聞き取りにくかったり、映像が動かなくなったり等のトラブルがあり、ご不便をおかけしました。ただ、このような「ハイブリット型」の分科会とすることで、ご参集の方はもちろん、オンデマンド配信により音声や映像で、全国津々浦々の全連小会員の方に分科会の様子をお届けできたのは、大きな成果であったと自負しています。

また、大会に参加された皆様だけでなく、全会員へ事前に「大会要録」をお送りすることで、「自分も大会にリアルタイムで参加している」と思っていただけなら、幸いに存じます。「ご縁の国 島根」で行った本大会が、すべての全連小会員との「縁^{えにし}を結ぶ」大会となったとしたら、これに勝る喜びはありません。

終わりにあたり、今年度の研究成果が、次年度の記念すべき第75回東京大会に引き継がれ、更なる大きな成果が得られますことを衷心より祈念いたしまして「研究協議のまとめ」とさせていただきます。分科会へのご協力、誠にありがとうございました。(だんだん)